

マフラー作り (二)

松井 とし

母親たちは、集団の中のわが子の生活のようすを知る手だてとして、形に表れた物を評価しがちであることは理解していたつもりだったが、気が進まなくてもみんなと一緒に何かを作ったらごほうびを買って与えるという話には、やはり、がっかりした。

そんなある日、K男が家で作ったマフラーをうれしそうに、ややはにかみながら首に巻いて幼稚園にやってきた。すでに家族中のプレゼントも作り終え、外で遊んでいたS男が早速ご注進にやってきた。私に纏わりつくように「K君も家で作って来たんだって！」と弾んだ声で友だちの成就感や喜びを代弁しているのに、その瞬間、私は何か釈然としないものを感じてしまっていた。家庭という安定した場所で、母親の手助けを受けて物を作ることと、S男のように集団の中で、試行錯誤しながら製作に取り組むことを、同じレベルでは受け入れられなかったのであった。

K男は生まれた時から身体が弱く、緊張が強い子どもで、集団の中で自分を表せるようになるまで時間を要した子どもであった。母親はそんなK男の育ちを冷静に、見守り支えてきた、安定感のある人であった。降園の時に声をかけ、K男がとてもうれしそうにマフラーをして来たことを伝えると、「何事にも積極的で体力も勝る、二歳年下の弟の方が作りたがり、一緒に始めたら、K男も興味を示したので」と、きっかけを話してくれた。その時初めて、性格も生育歴も全く違う二人の息子の間に座って、それぞれの子どもにふさわしい援助をした母親の温かさが私に伝わった。マフラーは、たまたま形に表れたものであった。

あれから六年の月日が過ぎゆき、幼稚園教育要領の改訂も行われた。これからの幼稚園教育においては、家庭との連携なしにその充実は考えられないと言われている。

幼児の生活は、幼稚園から家庭へと連続していることにも理解が深まった。その連続性を幼稚園からの一方通行であるかのように、家庭に対しては安定した環境を求めながら、集団の中での生活のあり方にこだわっていた、あの頃の教師としての傲慢さと、視野の狭さを振り返って考えさせられている。

(元・幼稚園教諭)